

アオハル・ ミステリカ

A O H A R U
M Y S T E R I C A

せがわ
瀬川コウ／著
くっか／イラスト

アオハル・ ミステリカ

A O H A R U
M Y S T E R I C A

プロローグ



ろうかを駆ける。曲がりかどで先生にぶつかりそうになった。横をすり抜けると、その先生が「走るな」と注意してきた。振り返ることはせずに「ごめんなさい」と言いながら、それでも足はゆるめなかつた。

急がないと——。

目指すのは特別棟の三階にある教室。

階段を駆けあがり、息を整えながら前にしたのは社会科準備室だった。

ノックをせずに勢いよく開く。

細長い教室の壁ぎわには本棚が並べられ、資料のファイルや本がこれでもかと詰めこまれている。部屋の奥には教室で使うような机と椅子がワンセットあり、一人の少年——ミライが座っていた。

ミライが私をちらりと見て、なにごともしなかつたかのように視線を文庫本へと戻した。板チョコを口に運び、パキッとくたく。線が細く、少し長めの髪がミライの澄んだ瞳をおおい隠している。カーテン越しの光のレースが、ミライの頬をなでた。まるで一枚の絵のように、ミライは神秘的な雰囲気をもとつていた。

息を切らしている私からは切り離されているように、ミライの空間はゆつたりと時間が流れている。今までの経験から、大声でうったえようが、蹴とばそうが、彼のペースをくずすこととはできないと知っていた。

「ミライ、大変なの！」

彼は私を無視して、カップに入った紅茶を一口ズズツとすすった。

「吹奏楽部の楽器が全部なくなっちゃったの。明日、吹奏楽部は町おこしイベントに出る予定で、このまま楽器が見つからなかったら、イベントに出られなくなっちゃう。毎年櫛中の演奏を楽しみにしている人がたくさんいるのに」

事の重大さは伝わったはずだが、彼は静かに文庫本のページをめくるだけだった。いらつとするが、ここで怒つてもしかたがない。彼を動かす方法はひとつしかないのだ。

「楽器は、昨日の放課後に倉庫に移動したはずなの。でも、今日、どこにも見当たらない」
ミライはまったく動かない。

えー、と。

彼の好奇心を刺激するような言葉を考えながらしやべる。頭がこんがらがって、熱くなる。

「全部を移動する時間なんてなかった。そう、……できない。不可能なんだよ」

ミライの耳がピクリと反応した。

文庫本をパンと閉じて、私を見つめてくる。彼のくすんだ瞳に、輝きが灯る。彼は魔法の呪文のように、そつとその言葉を口にした。

「ミステリカ」

その言葉に、ほつと息がこぼれた。

ミライが立ち上がり、近くに立てかけてあったパイプ椅子を自分の椅子の横に並べた。群青色のクッション部分を手のひらでたたき、座るようにうながしてきた。

「詳細を教えてください」

「うん」

こうなつたらミライは推理をはじめてくれる。誰よりも心強い味方だった。私と彼の間には妙な関係が生じていて、一言では片づけられない思い出が数多に存在した。

彼に詳細を説明しながら、はあ、と息をついた。

たぶん、情けなさから出たため息なんだろう。

私が誰かを頼ることになるとは思わなかった。

私はいつも一番で、誰よりも優れていて、みんなに求められる存在だった。だから誰にも頼る必要はない。いつも自分一人ですべてにかしてきた。できていた。

私は特別だから――。

それでも私は、認めなくてはいけない。

三良井晴樹が、私よりも上の存在だと。

アオハル・ ミステリカ

A O H A R U
M Y S T E R I C A

【1章】

となりのクラスからのカンニング



二位。

寝ぼけて目がかすんでいるのかと思つた。配られた順位表にくつつくほどに顔を近づけてみる。

二位。変わらずその文字は存在している。指でこすつてみても二位。息を吹きかけてみても二位。

「……ほんとに？」

問いかけてみても変わらず二位だった。一番の次。最もの次。なによりもの次。二番だった。

楡形中に入學してすぐに行われた学力テストの順位だった。小学生のころは順位なんて出なかつたし、百点の人も多くいたのであまり差が明確ではなかつた。

中学では小学校とは違ってテストの結果で順位が出ると聞いて、わくわくしていた。私が一番に決まっているからだ。

それなのに、二位。

どういうことだ。なにが起きているのか理解できなかった。

小学校のテストでは百点以外取ったことなどなく、運動も得意で短距離走や走り高跳びもいつ



もトップだった。ピアノコンクールでは金賞ばかり。あらゆるもので、一番を総なめにしてきた。

——咲久ちゃんは天才だから。

周りの子たちが私との差を表現するためにそんな言葉を口にしていった。

「咲久ちゃん、どうだった？」

声をかけられて、体がびくつと反応する。順位表を力任せに閉じる。くしゃつと潰れる音がした。

「どしたの、そんなに慌てて。あつ、さては順位悪かったんでしょ」

「なんだ桐絵か……。急に後ろに立たないでよ」

野木桐絵は小学校の時から友達だ。みんなが私と距離を取る中、ただひとり、私と同じ目線で話してくれる子だった。だからこそ、デリケートな順位についてもさらつと聞いてくる。

「別に、悪かったわけじゃない」

「じゃあ見せてよ」

「やだ」

桐絵から順位表を遠ざけると、追いかけるように手を伸ばしてきた。このズケズケとしたところが彼女のいいところであり、時に悪いところであつた。今は悪いところだ。

「いいじゃん。良かったんでしょ？ 順位」

「良くない」

「悪くないって言つたじゃん」

「悪くないし、良くもない」

うそだ。悪い。最悪だ。

ある本に書いてあつた。

『この世にあるのは、一番かそれ以外だ』

二番も三番も変わりはない。一番だけに意味がある。

日本で一番高い山は富士山だけれど、「二番は？」と聞かれると答えられない。オリンピックでは金メダリストにインタビュアーが集まるし、好きな人から「君は二番目に好き」なんて言われた日には「そんなの意味がない」と思うだろう。……別に好きな人はいないけれど。

一番か、それ以外。

だからこそ私は常に一番が良かった。そうであり続けてきた。

中学に入ってもそれは変わらないだろうと思っていたのに……。

「もーらい」

「あ、ちよつと、桐絵！」

桐絵に順位表をうばわれた。「どれどれ」と順位表をのぞきこむ彼女が、目を見開いた。

「わ、全部二位じゃん。すごい」

二位、という言葉が突き刺さる。

全部二位なのだ。

学力テストは国語、算数、理科の三科目だった。それぞれの順位が二位で、総合順位も二位だった。

「返して」

桐絵から順位表を取り返すと、封印するかのごとくカバンの奥底に丸めこんだ。

「やー、それにしても、咲久ちゃんが二位か」

「うっ……二位って言うのやめてよ」

「なんで？ 十分すごいのに。私なんて七十四位だよー」

「……今まではずっと一位だった」

桐絵がきよとんとした顔をする。

「そうかもしれないけど、でも中学になって人も増えたんだから。一学年に二百人もいるんだよ？ その中で二位なんだから、十分すごい」

「すごいくない」

比べる相手が何人になろうか、二位は二位なのだ。

私の上に一人いる。

その一人は、きつと私と同じように小学校では天才と呼ばれていて、今回もなんの疑いもなく一位を取り、中学もこんなものかと思っただけで胸がむかむかした。

想像するだけで胸がむかむかした。

「あ、そういえば、入る部活は決めた？」

「や、まだだよ。桐絵は決めたの？」

「私は美術部だよ、もう入部届も出しちゃった」

先日、部紹介があった。みんなが体育館に集まり、上級生たちがそれぞれの部活をアピールするのだ。私はどれも真剣に見たが、それでもどの部活にも入る決心がつかないでいた。

「桐絵は昔から絵がうまかったもんね」

彼女は小学校の時から絵を描いており、教師たちからも注目されていた。県の美術コンクールで銀賞を取ったことだってあった。

桐絵が「え？」と笑った。

「なに言ってるの、咲久ちゃんの方が上手なのに。美術コンクールで金賞だったじゃん」

「……………うん、まあ」

薄暗い記憶が蘇る。屈託のない表情を浮かべる桐絵から思わず視線を外してしまった。

「咲久ちゃんも美術部、どう？」

「ん、考えとくよ」

入部届はカバンの中に入ったままになっている。提出期限は六月末だ。まだ一ヶ月もある。その間にじっくりと決めたらいい。

その時、教室前方のドアが開き、担任の間口先生が顔を出した。

「言い忘れてたけど、今日は五時から職員会議だから、その時間、職員室は閉まってるぞ。部活で使った鍵を返す人は用務員室に戻してくれ。貸し出しノートも用務員室に置いておくから、名前書けよー」

桐絵含め数人が「はい」と返事をする、間口先生はそそくさと姿を消した。

中学に入ってから知ったのだけれど、部室の鍵は職員室で一元管理されているようだった。放課後に部室の鍵を開けるのは新人である一年生の仕事であることが多いらしい。

……まあ、部活に入っていない今の私には関係のない話だ。

部活動は強制だけれど、別段やりたいことはなかった。このまま適当なゆるい部活に入って幽霊部員として過ごす気がする。

文芸部あたりがいいかな。部活紹介でも先輩がひとり出てきてほそぼそしやべっていただけだったし。あの感じだと実質、活動していかないのかもしれない。だとしたら好都合だ。

「……………」

なにかやりたいけれど、そのなにかが見つかからない。

あせる気持ちもあるが、本当にどの部活にも入ってみたいと思わなかったのだ。

部紹介ではキラキラした表情の先輩たちが、自分たちの部活の良さを堂々と紹介してくれた。充実していて、楽しそうで、本当にその部活が好きなのだろうと思った。

あんなふうには、私はなれるのだろうか？

まったく想像できず、尻ごみしてしまった。

ろうかからざわめきが聞こえて、思考が途切れる。なにかあったのだろうか？

「どうしたのかな？」

桐絵がそう言ってるうちに様子をみにいく。しばらくして、さつき先生がやったようにドアから顔をのぞかせた。

「咲久ちゃん！」

「なに？ どうしたの？」

入学したばかりでまだ仲良くなっていない人も多いというのに、いきなり大声で名前を叫ばないでほしい。恥ずかしい。ほら、みんなが私を見てる。

しかし、桐絵の叫びは、その大声にふさわしく私にとっては大事件であった。

「順位表が貼り出されてるよ！ 名前も出てる！」

「わっ、すごい。二位がふたりいる！」

順位表の前で私は立ち尽くしていた。となりで誰かがなにか言っているがよくわからない。あたりの喧噪が遠く聞こえた。目の前のことを処理するので頭がいつぱいだった。

三良井晴樹。

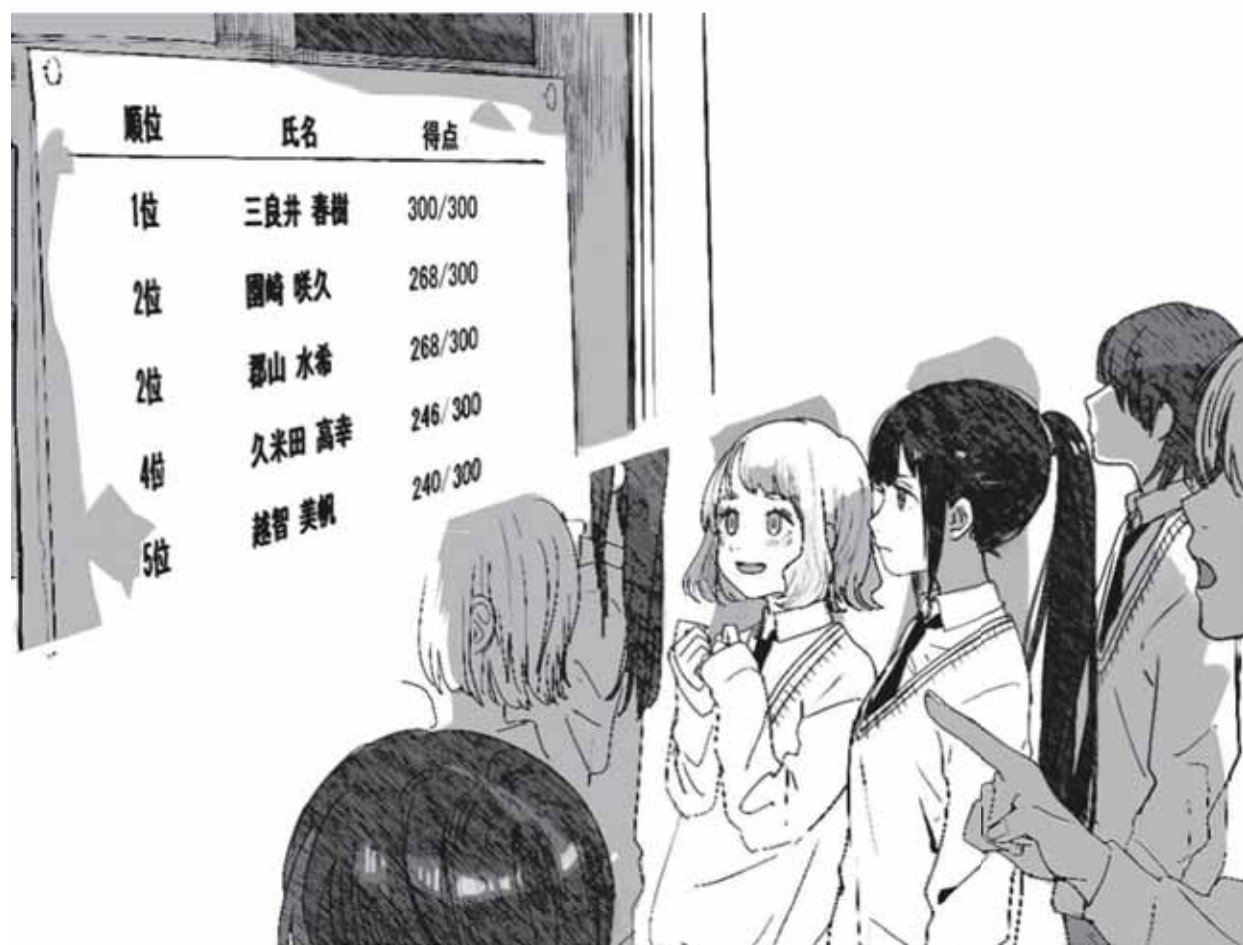
その名前が私の上には鎮座していた。

三良井晴樹の得点は300点。

300……、今回のテストは300点満点だ。

一方で私は268点。たしかに小学校の復習テストではあったが、決して簡単ではなかった。

あまりの差に愕然とする。さつき順位表を開



いて二位だと驚いた。しかしそれでも正直なことを言えば、一位とは僅差だと思っていたのだ。それが……、ここまで差があるとは思わなかった。

その場で順位表をはがしてやぶり捨てたい気持ちを、拳をにぎりこむことでガマンした。三良井晴樹、300点。

そこから目が離せなかった。何度見てもそれは現実として存在している。夢にしか思えなかった。見つめ続けることで、ようやくそれが事実として頭に染みこんでいった。

満点なんて、そんなことありえるの？

小学校の一問五点とか十点とかのテストとはワケが違うのに。

もしかして、カンニングとか——、そこまで思考してはつとする。つい嫉妬からひどい罪を被せてしまうところだった。証拠もなく人を疑うなんて最低だ。

それでも不正を疑ってしまうくらいに、目の前のことは非現実的だった。あたりを見回してみるが、それらしい人物はいない。

ミライの顔は知らないが、この場に一位を取った生徒がいたらすぐにわかる。きっと、この場にいる全員を見下した余裕の表情で順位表を眺めているに違いないからだ。

しかしここにいないとなると、もはや見る必要すらないということだろうか。自分が一番なことはわかっているし。

勝手な想像だとはわかっているが、ミライの人物像はただただ最悪だった。一度顔を拝んで、ふんぞり返った彼に文句のひとつでも言っただりしたい。

「あー、一位はミライくんかー」

となりに立つ桐絵が気の抜けた声を出した。まるで知っているかのような口ぶりだ。

「知ってるの？」

「知ってるというか……そう言われると知らないっていうか……。ちょ、ちよつと！ 近い近い！」

気づいたら桐絵の顔にだいぶ近づいてしまった。はっとして離れる。桐絵はほっとしたように笑みを浮かべた。

「それで、ミライのこと知ってるの？」

「噂になってるからね。ミライくん、同じクラスだよ」

「え!? どの人!？」

「あまり教室にはいないかなあ。授業だけ受けて、休み時間とか放課後は消えるようにいなくなっちゃうし」

そう言えば、窓際の一番外ろにひとつだけいつも空いている席があった。誰の席なんだろうと休み時間にふと疑問に思ったこともあるが、授業中は振り返ったりしないので、そこに誰が座っているかは知らなかった。

まさか、あの席にミライが？

「今はどこにいるの!？」

「ちよ、ちよつとまた近くなってるよ。……放課後は文芸部の部室にいるらしいって噂で聞いたけど」

「……文芸部？」

「うん。特別棟にあつたと思うけど」

「わかった、特別棟ね。ありがと！」

桐絵をひとり残し、走り出していた。

息を切らして文芸部の部室として使われている社会科準備室の前に立つ。

「こんなところにあつたんだ……」

手を膝について息を整える。

ようやく見つけ出した。

特別棟といつても広く、どこに部室があるのか知らなかつたので探し出すのに手間取つた。玄関に行つて学校内案内図を見てようやく場所がわかつた。

特別棟の三階。ほとんど誰も立ち寄らないこの場所に文芸部の部室は存在した。

ノックをしかけて止める。どうせならいきなり開けて驚かせてやろう。マナー違反なのはわかつていたが、学年一位が情けなくおどろく姿を見たいという気持ちを抑えられなかつた。

勢い良くドアをスライドさせると、奥に座っている人影があつた。逆光で見づらく、目をこらしてようやく姿をとらえた。

人形みたい——というのが最初の印象だつた。

肌が白くて線が細い。さらりと揺れる前髪が右目をおおい隠している。左目に自然と視線が

いった。大きな瞳は澄んだ黒色で見ているだけで吸いこまれそうだった。まつげが長く泣きボク
口があり、可愛らしい印象だ。

部室のテーブルには、学校には場違いなチョコレートケーキの載った白い皿が置かれていた。
どうやら、その人物はちょうど一切れ目を口に運ぼうとしていたらしく、そのポーズのまま目を
見開いてこちらを見た。

「……女の子？」

「男だ」

不機嫌そうな声はたしかに男子のもの。驚かせるつもりが、逆にこちらが「わっ」と声をあげ
てしまった。

彼はフォークを皿に置き、私を正面に見据えた。顎の輪郭が綺麗で見とれていると、彼の不機
嫌そうな視線に気がついた。

「君はなんだ。急に開けるなんて失礼じゃないか」

まるであなたの部屋みたいな話しぶりね、と言いたかったが飲みこんだ。今は人気のない部室
でこっそりケーキを食べようとしている美少年はいいとして、目的を達成するべきだ。



「ねえ、ここにミライってやついない？ たぶんすごい性格悪いやつなんだけど」
美少年の長いまつげがピクリと反応した。
「……ミライは僕だが」

「え？ あなたが？」

想像していた三良井晴樹とはずいぶん違った。眼鏡をかけて私を見下した目で見てくるような、前髪がぱつっんの男子だと思っていたのだ。

「……………」

でもよく見ると、その瞳は知的で冷めていた。そこだけはイメージと一致して、彼がミライなのだと理解できた。

ミライ。三良井晴樹。

満点で一位を取ったにもかかわらず順位表も見にこない嫌味なやつ。

「用がないなら帰ってくれ。邪魔だ」

彼は「話は終わった」とばかりにフォークに手を伸ばす。

その態度にむっとした。そもそもこんなところでなにを食べているんだ。先生に見つかったら怒られるに決まっている。

「ちよつと、なに普通にチョコケーキ食べてるのよ」

「チョコケーキ？」

彼は頭上にハテナを浮かべて私を見る。

「それ、チョコケーキでしょ」

平皿にちよこんと載った円筒形の物体。どう見てもガトーショコラにしか思えなかった。

「これはシャビーナだ」

「しゃびーな……？」

「スペイン発のデザイナーズパティスリーであるブボバルセロナのケーキだ。クープ・デュ・モンド・ドウ・ラ・パティスリーで受賞したこともある」

「ぶぼ……くー……はえ？」

大量のカタカナ語に圧倒され、変な声が出てしまった。なにを言っているのかまるで理解がで
きなかった。

「買うのに本当に苦労したんだ」

ミライは目をつむって感慨深そうにゆっくりと天井を仰いだ。

「……で、結局シャビーナってなんなの？」

「チョコケーキだ」

「やつぱりチョコケーキじゃないの！」

なんだこいつ！ 怖っ！

「もういいだろ。この至福の一時をくだらないことで邪魔するな」

「校内はお菓子類の持ちこみは禁止のはずよ。ルールをやぶっていいと思ってるの？」

「なに言ってるんだ。バレなければいいだろ」

「は？」

当然と言わんばかりに堂々としている。ミライは足を組んで、うんざりしたように頬杖をついて私を見た。

一位なのに、この態度。

「学年一位でしょ。みんなの模範になるような行動しなきゃ」

ミライはやれやれと言いたげに深くため息をつく。

「学年一位なのはみんなが良い点数を取らないのがいけないだけで、それで僕の行動が制限されるいわれはない」

暗に馬鹿だと言われているようで頭に血がのぼりかけたが、こんなところで怒ってもしかたが

ないと冷静れいせいになった。気がつくとき大きな瞳ひとみが私わたしを見てはつとする。長いまつげといい、日本にほん人じん離はなれした見た目めだ。ハーフなのだろうか？

「君きみは園崎そのざき咲久さくだな」

「え、どうして……」

「同じクラスなんだから覚えていて当然とうぜんだろう」

そう言いわれると、クラスのほとんどの人ひとを覚えていない自分が急に冷たい人間にんげんのように思おもえてくる。ミライは私わたしを足あしのつま先さきから頭あたまのてっぺんまでじろじろと見みた。顎あごに手てを置おいて、ふむ、とうなる。彼の瞳ひとみに見みつめられると妙まうに緊張きんちやうする。

「な、なによ」

「今いままでずっとあらゆる成績せいせきが一位いちいだったが今回のテストで人生初の二位にいを取り、屈辱くつじやく的な気持きもちちから文句もんくのひとつでも言いいたいと思おもって僕ぼくに会あいにきた。そして校則こうそくに違反いはんしていそうなものを見みつけたから意気揚々いきようようと指摘してきしている——こんなところか」

「はあ!? 違ちがうわよ。急になにを言いい出すの。別にそんな、あなたが満点まんてんで一位いちいとか全然ぜんぜん気にししてないし、二位にいは二位にいでいいかなって思おもってるし」

とつきにうそをつく。

「凶星だからこそ過剰に反応し口数が多くなる。負けず嫌いの典型だね」

彼の言葉が私の感情をなぞっていき、背筋がゾツとした。なにかを言い返そうとするが、彼がうつつすらと笑みを浮かべているのを見てやめた。なにを言ってもこの瞳にすべてを見透かされそうだった。ここは話題を変えよう。

「そもそもここは文芸部の部室でしょ？ 我が物顔でなにやってるのよ」

「一応、部長の先輩がいるんだけどね、幽霊部員だから来ないよ」

「ああ……」

部紹介の時にしゃべっていた先輩だろう。

部活動は強制だ。だからこそ文芸部のように、部活をやりたくない人が入るための部も必要なのだろう。実質帰宅部だ。

「ミライは文芸部なの？」

「そうだ。実際は僕ひとりしか来ないからここは僕の部屋も同然だな。少しずつ私物も増やして、昨日やつと冷蔵庫も入れられた」

彼が部室の隅を指さすと、私の膝あたりの高さの白い立方体があつた。ミニ冷蔵庫だろう。

「冷蔵庫持ちこんでるの!？」

「当然だ。スイーツを保存するのに必須だろう」

まるで私がおかしなことを言っているかのように訝しんだ視線を投げかけてくる。なんだか納得いかない。

「……どうしてわざわざここでケーキ食べてるのよ。家で食べなさいよ」

わかつていないな、と言うように彼は人差し指を突き出した。

「ミスTERICAに思考を巡らせながら食べるスイーツこそが至高なんだよ」

「え？ ミスTERICA？」

彼の言うことはたまにわからない。今度は流されないぞ、と追及しようとしたその時だった。

校内放送の開始を知らせる電子音が、軽快に鳴り響く。

部室がせまい分、うるさいほどに放送が響く。

『一年三組、園崎咲久さん、園崎咲久さん。まだ校内にいましたら至急職員室に来てください。繰り返します——』

……え？ 私？

呼び出される心当たりはまったくなかった。驚きを共有したくてそれとなくミライを見ると、彼はぼうっと放送が流れたスピーカーを眺めていた。しかし私の視線に気がつく、早く出ていけと手で払う動作をする。

もう二度と来るものか。

そうやってずつとひとりでケーキでもなんでも食べていけばいい。

ふん、と鼻息荒く部屋から去った。

職員室への呼び出しは大したことではないだろうと思っていた。しかし予想とは裏腹に、私を大きく揺るがす事件であった。

担任の間口先生が神妙な面持ちで切り出す。

「園崎、……お前、カンニングしたか？」

職員室に入ると、独特な紙とインクのおいがした。たぶん印刷機からするものだろう。生徒に配るプリントが大量に作られるこの場所では、印刷機は常に稼働しているのかもしれない。天井の隅、職員室を見渡せる位置には監視カメラが設置されていた。校長先生が、ほかの先生たちの仕事ぶりをのぞいたりするのだろうか？

担任の間口先生のデスクに行くと、先生の雰囲気でした。ただことではないのだと察した。先生の私を見る目は鋭く、それを取りつくりかのように口元には笑みを浮かべている。

私をとなりの椅子に座らせ、顔をのぞきこんできた。

「先生は、誰でも間違えることがあると思う」

「は、はあ……」

「でも問題はこの先にある。その間違いを誤魔化してまた同じ過ちを繰り返すのか、それとも間

違いを正直に認め反省し、成長への一步を踏み出すのか。……わかるか？」

急な語りに置いてきぼりになる。私がなにかしたのだろうか？

近くを通りかかった先生がちらりと私を見る。その瞳の奥で、明らかに私を蔑んでいる色が見て取れた。

なんなの……？

「よそ見するな。ちゃんと聞いてるか、園崎」

先生の声音に若干の怒気がこもった。私は「はい」と返事をし、先生にきちんと向き直る。私はどうして今怒られているのだろうか？

意味がわからない。

しかし、その理由はすぐに明らかになった。

「園崎、……お前、カンニングしたか？」

「えっ……」

理解が追いつかず、言葉を失った。

私が？ カンニングをした？

「少なくともそう疑われている？」

「学力テストでだ」

「や、してな——」

「園崎」

答えようとしたりしたところで間口先生が私の名を呼び、さえぎった。先生は自分自身を落ち着かせるように深く息をついた。

「よく考えて答えるんだ」

心当たりはまるでないが、ここまで言われたらしかたない。なにかカンニングを疑われるような行動を自分がとっていたのか、学力テストの日のことを思い返してみる。

……やはりなにもない。普通にテストを受けただけだ。

休み時間に復習はしていたが、試験中にはそのテキストを机の中ではなくカバンの中にしまっていたし、問題を解き終わったら周りなんていつさい見直しに見直しに徹していた。

カンニングを疑われるようなことはまったくしていない。

「……してないですよ」

「そうか、わかった。……疑って悪かった。もう行っていいぞ」

先生はそう言うで自分の机に向き直る。

「ちよつと待つてくだささい。どうして私がカンニングを疑われているんですか？」

「……風の噂だ」

「納得できません」

間口先生はため息をついて私を一瞥した。

「大した意味はない。気にするな」

「先生——」

どうして私に教えてくれないんだろう？ 疑ったことが本当に悪いと思つて居るのならきちん

とすべてを説明してほしい。さらに先生を問い詰めようとしたところで、私の後ろから先生に話

しかける声があった。

「間口先生」

「ん？ ああ、郡山か」

振り返ると、郡山水希がいた。思わず「ゲツ」と声をあげそうになるのをこらえる。郡山は可

愛らしい笑みを浮かべる。周囲にキラキラした光の粒が漂っているかのよう、彼女の笑顔は輝いていた。

「数学のプリント集めておきました。先生にお渡しすればよかったですよね？」

「ああ、悪かったな。ありがとう郡山」

間口先生が笑顔でプリントを受け取る。

郡山は私をちらりと見てから引き続き作りもののような笑みを浮かべて間口先生に話しかけた。

「あれ？ 園崎さんもなにか用事だったんですか？」

「なんだ、郡山と園崎は知り合いなのか？」

「はい、今はクラス違いますけど、小学校では一緒だったんです。仲良くさせてもらってますよ」



ね、と郡山ごほやまが笑顔えがおでうながしてくる。関かかわるのはごめんだったが、この場ばで変へんに否定ひていしても先生せんせいにあやしまれるだけだろう。

「あ、ま、まあ……」

「そうか。ちようど園崎そのざきの用事ようじも終わおつたから二人ふたりで戻もどつていいぞ」

「はい」

え？

先生せんせいの態度たいどに一瞬いつしき呆然ぼうぜんとした。先生せんせいに聞ききたいことは山やまほどあつたが、こんなことを言いわれたら戻もどらざるを得えない。

どうやら間口先生まぐちせんせいは、これ以上いじょうカンニングについて話はなすつもりがないらしい。

しかし、このままでは嫌いやだ。

カンニング疑惑ぎわくをきつぱり否定ひていしたらそれ以上いじょうは追及ついさくしてこなかったが、ほつとした様子ようすではなかった。内心ないしんではまだ疑うたい続つづけているのだろう。間口先生まぐちせんせいだけではない。このままでは、ほかの先生せんせいたちも私わたしのことを疑うたつたままだ。なんとか弁明べんめいしなくては。

「あの先生せんせい——」

「ほら行こう、園崎さん」

郡山に手首をつかまれ、そのまま強引に引つ張られた。

「ちよつと」

声をかけても郡山は振り返る様子はない。

郡山は職員室を出る時にも笑顔で「失礼しました」と頭を下げる。扉を閉めた直後、まるで笑顔の仮面がはがれたように表情ががらりと変わり、私を見下したような目で見てきた。

「あんた、中学入って早々怒られてんの？」

その声は、先ほどよりもずいぶんと低い。

郡山は先生の前だと人が変わったかのように猫を被る。その変わり方はまるで二重人格かのようだった。先生からの評価を気にしているのか、小学校時代からよく先生の手伝いを申し出ていた。中学でも同じようにしているのだろう。

「そういうわけじゃ……なにか誤解してるみたいで」

「ふうん、……とところで」

郡山が心底意地の悪そうな表情を浮かべた。

「あんたがカンニングしたって聞いたんだけど」

「は？ 誰から？」

「さあねー。……でも、まずいんじゃない？ 入学早々そんな問題起こして。みんなからも先生からもそういう目で見られちゃうってことでしょ？ 今だって、本当はそのことで呼び出されてたんじゃないの？ うわあ、私だったら耐えられないな」

口の端にいやらしい笑みを浮かべる。

「じゃ、精々頑張つてね」

私の肩を軽くたたくとそのまま自分の教室へと戻っていった。

嫌なやつ。

郡山水希は小学校からの同級生だ。私がいとも一番なのが気に入らないのか、なにかと突っかかってくる。しかもなにかにつけて張り合ってくるので面倒くさい。常に私と比べ、ひとつでも勝っていることが見つかる、それを誇らしげに宣言してくるのだ。

同じ中学にはなったが、小学校の時よりも一学年あたりの生徒数も多いし、クラスも違うのでもう関わることはないだろうと思っていた。でも、そういうわけにはいかないようだった。

いじわるな郡山のことだから、適当にうそをついているのかもしれない。でも、タイミングが良すぎる。間口先生も、風の噂で聞いた、と言っていた。いつたい誰がそんな噂を流したんだろう……。

郡山以外に、さつそく誰かに目を付けられているのだろうか？

「あれ？ 咲久ちゃん。こんなところでなにしてるの？」

去つていく郡山の背中を見つめながら職員室の前で立ち尽くしていると、声をかけられてはつとする。目の前にイーゼルを抱えた桐絵がいた。少し離れたところには同じように画材を抱えた生徒が二人いる。

「ええと、ちよつと呼び出されちゃって」

「ああ、そういえば放送あったね。なんだったの？」

「……大した話じゃないよ」

「そうなの？」

桐絵が心配そうに顔をのぞきこんでくるが「ちよつと私にカンニング疑惑がかかってねー」なんてことは言えるはずもなかった。

「まあ、中学はこういう感じなんじゃない？ ちょっとしたことで放送で呼び出されるんですよ」
小学生の時は放送で呼び出されるなんてことはなかった。先生が生徒に用事がある時は教室まで来ていたのだ。でもそれは部活がなく、誰がどこにいるのかある程度わかっていたからだろう。中学はあまりにもみんながバラバラに動くので、放送をかけた方が手取り早いのだろうと思つた。

「……あ、ミライくんには会えた？」

「ああ、うん」

苦笑すると、桐絵は「え、なになに」と笑みを浮かべた。

「どうだったの？ なに話したの？」

「えーと、……うん、すごい変なやつだった……」

人形のような見た目で、先輩が寄りつかないのをいいことに部室を占領し、冷蔵庫を持ちこみ、カタカナを連発して、ケーキを食べている。

すべて事実だが、なにを言っているのかわからないと思うので、細かいことは省いて口をつぐんだ。

「そうなの？ 今回のテスト、ミライくん満点だったからみんなの中で相当話題になってるよ」

「ああ、そうなんだ……」

彼はそういうのをうつつとしがりそうだ。あの部屋でケーキを食べることが生きがいみたいな人なのだろうから。

「それじゃ私は部活に戻るね。今日は校庭で写生なんだ！」

「うん、頑張ってるね」

桐絵が小さく手を振って、少し離れた場所で待っていた二人のもとへ戻っていった。合流するとすぐに「どこで描こうか？」と会話が盛り上がっているのが聞こえてくる。

「……………」

桐絵は誰にでも話しかけるし、誰からも話しかけられる子だった。私とは違って周りにいつも人がいる。ニコニコしていて、なにをするにしてもいつも楽しそうにしている。みんな、彼女の明るさに自然と寄っていつてしまうのだろう。

笑顔で仲間たちと歩く桐絵を見て、自然とため息がもれ出た。

桐絵が充実した学校生活を送っているというのに、私はどうだ。

さつそく担任からはカンニング疑惑をかけられ、郡山にイヤミな絡みをされ、部活だって決まらず……先が思いやられた。

「はあ……」

もう吐き出す息もないんじゃないかというくらい何度もため息が出た。

「君い、面白い話だったよ」

「ひやつ!？」

思わぬ方向から話しかけられ体が跳ねた。ぱつと振り返ると、ミライが職員室のドアに寄りかかって腕を組んでいた。口元には笑みすら浮かべ、うんうんとうなずいている。

「い、いつからそこに？」

「今こつそり職員室から出てきたところだ。あ



と僕はすごい変なやつではない」

「さっきの会話聞いてるんじゃないの！」

とうか桐絵と話していた時もここにいたとすると、どうして桐絵が気がつかなかったのかが気になる。その時はまだ職員室の中にいて、扉の向こうで話を聞いていたのだろうか。そんなことをしていたら先生にとがめられそうだが、怒られた様子もないし、不思議だ。

「とうか、どうして職員室に？」

「君を呼び出す放送の声が変だったからな」

「変？」

「放送の声の主は一年三組の担任、間口のものだ。君は三組の生徒であり、品行方正。『学年一位らしい行動』なんて言葉が口から出てくるということとは、かつて君は学年一位の生徒であり、それらしい振る舞いをしていたということなんだろう。つまり周りからどう見られるかを大変気にして生きている。みんなからは良い子として映っているはずなのに、深刻な口調で間口が君を呼び出すのはおかしいと思つてね」

トゲのある言い方だが、ミライが言っていることは正しい。たしかに私は優秀な生徒らしく、

みんなの模範となるように意識して行動してきた。先生に褒められこそすれ、怒られたことなんて一度もなかった。

「これは匂うな、とついてきたというわけだ。僕を部室から出すなんてなかなかやるな。すごいぞ」

「全然嬉しくないんだけど……というか職員室にいたって、まさか……」

「なんだ？ 君のカンニング疑惑の話ならすべて聞かせてもらったぞ」

「ええ!? どこで!？」

「だから普通に職員室にいたと言っているだろう。君が入った直後に僕も入室して、その後は近くにいたんだ」

「そうなの……はあ……なんかあんたと話してると疲れるわ……」

いや、話さなくても、目の前にこいつがいるだけで疲れる。

本来であれば、先生からカンニング疑惑をかけられているところなんて、絶対に誰にも見られなくなかった。

でも、今日ほうんざりすることが多くて、いちいちショックを受けることすら面倒な気持ちに

なっていた。

ミライが一度手を打った。

「君が疲れていようがどうでもいい。結果として大収穫だったんだから」

「大収穫？」

「ああ、今回のカンニング事件。これは——ミステリカだ」

「え？ ミステリカ？ さつきも言ってたけどそれってなに？」

ミライはやれやれと言いたげに首を横に振った。

「君にもわかるようにかみ砕いて説明しよう」

なんだか言い方が馬鹿にしているようでむっとする。

しかし、彼が次に発した言葉ですべてのことがどうでも良くなった。

「いいかい？ 今回の件は、となりの教室からカンニングが行われたことが、まさにミステリカなんだ！」